

伝えたい思いがどの子にも育つ保育環境 —絵本を題材としてやり取りをする保育の可能性—

The nurture environment that the thought that
every child would like to tell grows up
— Possibility of the nurture that it's exchanged by using
a picture book as a base material —

古橋 真紀子
(Makiko FURUHASHI)

Abstract :

To have an interest in the outside world and concern reread a nurture record about nurture practice to an infant weaker than the same age or an infant stronger in partiality than the same age. Then a possibility that an infant changed by piling up exchange with a nurture person using a picture book has been seen.

So a part of exchange through a picture book was picked out from a fulfillment record, it was put in order by a time axis and it was analyzed. It has been seen from there, I'll report on "interest to a person, the interest and concern grow up, I'd like to tell, the nurture environment that I grow up".

キーワード：伝えたい思い、絵本

Keywords : expectation, picture book

1 はじめに

絵本について、生田美秋（2013）は、「読み合い・読み聞かせは、子どもの心に多くの可能性の種をまく行為である」と述べ、木村裕一（2008）は絵本が備える「対話の要素」を指摘している。読み手である親が、赤ちゃんとのコミュニケーションを図る道具として絵本を活用し、絵本のことが促す遊びを通して、赤ちゃんとは話をしていると述べている。

また、瀧薫（2010）は、子どもたちにとって

絵本の読み聞かせは、「読み手である大人が常にそこにいっしょに」と述べて、「絵本を通して、読み手と聞き手が共にその体験を共有することで、豊かな感情が育まれる」「毎日、身近な大人と共に心躍らせながら、絵本の世界を体験することで、感情はますます豊かに育まれる」としている。

そして石井光恵（2013）は、赤ちゃんにとっての絵本について、「読んでもらうことは、わかるわからないよりもまず、赤ちゃんにとってう

れしいこと」とし、「絵本を介して、赤ちゃんとのコミュニケーションを楽しく豊かに育んでいく。それが、赤ちゃんと絵本を一緒に読む秘訣」と述べ、「この時期の絵本は、一緒に楽しんで遊ぶためのもので、早期教育的な知識を増やすとか脳を鍛えるといったものではない」としている。そして、「何度でもその要請に応じて読み続ける愛情が、大人には求められる」とし、要求に応じて繰り返し読み聞かせることの重要性を指摘している。

このように絵本の読み聞かせは、人と共に楽しむ要素ややり取りの要素もっていることが明らかにされてきた。

更に、勅使千鶴（1999）は、読み聞かせは、「それに心を動かされ、その思いを身体で表したいという子どもの内なる欲求」を引き出すと述べており、絵本の読み聞かせが表現につながる可能性を示唆している。

本稿では、以上のような考えをバックグラウンドにもちながら、自閉症の診断を受けている幼児に保育を行った記録を、絵本を介した関わりの部分に着目し読み直すことで見えてきたことについて報告し、保育環境の構成に絵本を題材としてやり取りを取り入れることが、子どもの伝えたい思いの育ちに与える効果について論じたい。

2 本研究の目的と方法

(1) 本研究の目的

本研究では、幼児が変容していった保育実践の記録から読み取れた、絵本を取り入れた保育環境が自閉症幼児の対人面の発達に与える可能性について報告し、伝えたい思いが育つ保育環境の在り方について一提案をすることを目的とする。

(2) 対象

i) A児：4歳女児。発語はなく、何かを要求するときは、大人の手首をもって要求物に近づける。気に入った単語や好きな歌などは、ろれつが回らないながらも口ずさむことがある。クリームチューブやシャボン玉、石鹸など、特定の物への興味・関心が強いが、表情も乏しく、興味のないものに対しては意欲が

ないように見える。名前を呼ばれると呼んだ人の方を振り返ることもあるが、全く気にしないこともある。自分のイメージで遊ぶことを好み、大人が声をかけたり、関わって遊ぼうとすると、していたことをやめてしまったり、遠くに行ってしまう。粘土や描画など、自分の思った通りに遊んでいるときには、長時間集中するが、自分の思いついたことや、やりたいことを止められることを嫌がる。嫌なことに対しては、「ああ。」と声を出し、体を反らせて嫌がったり、泣き叫んだりすることもある。言葉だけで呼びかけると反応がないが、物を見せて呼びかけると反応することもある。物を操作する遊具には黙々と取り組み、その間、保育者を意識する様子はほとんど見られない。集団での絵本の読み聞かせには興味を示さないが、一人でシリーズ本の中表紙の色違い一色のページを開いて並べていることがある。

ii) B児：3歳男児。発語はあるが、言葉によるコミュニケーションがとりづらく、活動の切り替え、指示に従うことが難しい。予定の変更、自分なりのやり方の変更が難しい。滑り台やトランポリンで遊んだり、上を見上げながらくるくる回ったり、ホールを何度も走って行き来したりして遊ぶことを好む。身体的な接触遊びは好まない。質問されて答えたり、誘われて応じることなどは嫌がる。動画等の台詞を繰り返し言うことを好む。

iii) C児：5歳男児。発語はなく、名前を呼ばれると呼んだ方に近づいて行くこともあるが、自分から声を出して呼びかけたり、快や不快を声に表したりすることはない。保育者に抱っこしてもらったりブランコに乗ったりしていないときには、自分ですることが見つけられずに手にしたりモコンや遊具を手の平に激しく当てながら歩き回って過ごしたり、股間を触ったりして過ごす。保育者からパズルなどの遊びを提案すると、正しい位置にはめるが、はめた後に保育者の顔を見たり、自分からしようとしたりすることはない。終わると逃げるように離れていたり、ピースを左手でもって右手に打ちつけたりして過ごす。

iv) D児：6歳男児。自分から保育者に関わってくることはほとんどない。指さしやジェスチャーでの表出はなく、発語はあるが言語での表出は少ない。自分の意思や要求を伝えたい場面で名詞を言うこともある。相手に視線を合わせたり、相手の声に反応したりすることが難しく、保育者からの働きかけに気づいても、そこからやり取りを続けることは難しい。また、自分のペースで課題をやりたがり、保育者と何かを一緒にする、交互にする、順番にすることが難しい。横から言葉をかけられることを嫌がる。反面、友達が楽しそうにしていると近づくこともある。友達ではなく、使っている物に興味をもって近づいているように見える。

(3) 期間と方法

201X年～201X+8年の実践記録から、「絵本」というキーワードのある部分を抽出して、幼児名と時系列で並べてまとめ直した上で、子どもの変容との関係を分析した。

(4) 倫理的配慮

S会施設長の同意を得た上で、研究の目的およびその意義を対象児保護者に説明し、個人情報保護を約束して、書面にて記録の分析及びそれに基づいて指導改善を行うことと、その経緯をまとめて研究に用いることに同意を得た。

3 結果

(1) A児

- i) 第Ⅰ期：集団での読み聞かせ場面では一度着席しても、水道や鏡の方に行ってしまう、誘っても戻らない。興味のあるものを保育室内から取り除いても、絵本の読み聞かせや保育者の方に近づくことはなく、その保育室外に出ようとする。
- ii) 第Ⅱ期：シャボン玉での遊びを終えようとしているタイミングで保育者がシャボン玉の写真が表紙になっている絵本を見せると、興味を示して近づいてくる。その後、保育者が本児の横に座り、読んで聞かせると座り続けてじっと見ていた。翌日、保育者が同じ本をもって歩いていると、近づいてくる。読み聞

かせるとじっと見ていた。2週間に渡り二人での絵本の読みきかせを積み重ね、保育者が学級で読み聞かせを行うと、シャボン玉の絵本であることに気づいて自分から着席し絵本を見るようになる。

- iii) 第Ⅲ期：保育者が学級でかきごおりの絵本の読み聞かせを行うと、自分から着席する。本を見て少し表情を変えるが、読み聞かせると見ている。読み聞かせの直後にかき氷を作って食べた。絵本の展開に合わせてかき氷を作って食べる活動を4回積み重ねた後、保育者が絵本の読み聞かせに合わせて言葉をかけると、食べるまねをしたり、動作をまねしたりするようになった。

- iv) 第Ⅳ期：かきごおりの本を本棚から取ると外側に向けてもち、ページをめくっている。集団での読み聞かせを再現しているように見えたため、保育者が正面の椅子に座って見ると一瞬顔を見る。保育者の横に座る幼児も出てきて、本児が人を意識して場の共有ができる機会となった。翌日には、集団での読み聞かせの場面と同じように保育者が椅子を並べて人形を座らせて一緒に見るようにした。

- v) 第Ⅴ期：自分で人形を椅子に並べたり、自分から保育者の手を引いて座らせたりしてから、自分は正面に座って本のページをめくったり、歌のような音を口ずさんだりする姿が出てきた。

(2) B児

- i) 第Ⅰ期：本児がよく台詞を言っている動物と滑り台の動画をYouTubeで探しあて、内容を覚えて一緒に台詞を言ってみると、保育者の手をもち保育者の口を覆うようにして制止する。
- ii) 第Ⅱ期：動画をペープサートにして、保育者は言葉を言わずに本児が言う台詞に合わせて動かすと嫌がらずに見ながら台詞を言う。本児が台詞を言っているときにペープサートを出して合わせて動かす関わりを2週間繰り返して遊ぶ。その後、故意に動物を間違えて操作すると動かしている保育者を見てから正しいペープサートを渡して修正しようとする。

- iii) 第Ⅲ期：本児が動画遊びをしていないタイミングで保育者がペープサートを動かしながら台詞を言って遊んで見せると、近くで見たり、台詞を順番に言ったりする。
- iv) 第Ⅳ期：ペープサートから、絵本型に変えて本棚に置いておくと、自ら手に取って見る。絵本を見ているときに保育者がやり取りを仕掛けるとのってきたり、台詞を言ってほしくて間をとって保育者の顔をのぞき込んだりするようになる。また、園庭の滑り台で遊んでいるときに、保育者と台詞を言い合って再現遊びする姿が出てきた。

(3) C児

- i) 第Ⅰ期：興味のある絵本はなく、渡された本は急いでページをめくって最後までいくと立ち去ったり、パラパラとめくって遊んだりする。集団での読み聞かせでは数ページを過ぎると席を立てて床に寝転んだり、絵本を見ずに股間を触ったりしている。
- ii) 第Ⅱ期：根野菜の絵本に、根野菜に混ざってモグラが登場するページで、保育者が表情をゆがめて「ちがう」というのを見て笑う。保育者の反応を期待して、その絵本の読み聞かせの日は笑顔でよく見ている。モグラのページが近づくと体を揺らしたり、保育者の顔を覗き込んだりするようになる。
- iii) 第Ⅲ期：自分から絵本をもって保育者の膝に座り、読んでほしいことを伝えたり、「ちがう」「ニセモノ」「へん」なページを見つけると保育者の反応を期待して見せにきたりして自分から保育者に関わるようになった。それと共に、手を横に振ったり、×を作ったり、おしまいのハンドサインをするなど、まねできる動作が増加した。

(4) D児

- i) 第Ⅰ期：DVDで見たことのあるアニメ絵本を一人で見ることを好む。横で一緒に見ようとすると絵本を置いて立ち去る。集団の読み聞かせでは絵本に注目し、サンドイッチの絵本の読み聞かせで保育者が食べる動きのジェスチャーを見せるとすぐにまねする。
- ii) 第Ⅱ期：動物の親子が出てくる絵本を一人

でじっくり見ているときに、横に座って文字を読んで聞かせると体をくっつけるようにしてきて、保育者の読みに合わせてページをめくる。保育者と視線を合わせることはない。

- iii) 第Ⅲ期：絵本に出てくる絵と文章に合わせて保育者が当てぶりで動くと一緒に演じる。本が最後までいくと、保育者の顔をじっと見て「どうぶつのおかあさん。」と言って座り、1ページ目を開いて読み始めた。その後、1か月位は、本児が絵本をもって近づいてきたり、顔を覗き込んだりしてきたときには、要求を察してすぐに応じるようにした。その後、同じ動きに対してすぐには応じないようにすると、顔を覗き込んで「どうぶつのおかあさん。」と言ったり、「〇〇先生。」と呼びかけて一緒に演じたいことを伝えようとしたりする姿が出てきた。

4 考 察

(1) 絵本を使った働きかけについて

本研究では、自閉症幼児の対人行動の変容に、保育活動中の絵本を使った働き掛けが影響を及ぼした可能性を改めて確認することができた。

これは、自閉症幼児にとっても絵本が備える対話の要素が有効であり、読み聞かせが子どもの心に多くの種を撒くことになる可能性を示唆するものであると考える。また、対象児たちが表現したときにすぐに保育者が反応をしてやり取りをはじめたり、対象児たちにとって保育者がやり取りしたくなる相手になるように共感的な態度で関わったりしたことで、表出の頻度が増えたことから、大人と心を通わせたり、人と一緒に楽しむ経験を積み重ねたりすることで、“またやりたい、もっと、繰り返し読んでほしい”という思いが育ち、そのことが“この人に伝えたい”という思いを育み、自ら人に対する関わりを表出することにつながった可能性があると考えられる。

(2) 伝えたい思いの育ちに影響を与えた絵本の特徴について

今回の対象児にとって、人に伝えたい思いが育つきっかけとなった働き掛けに使った絵本に

共通する特徴は①対象児が興味・関心をもてる内容のもの②やり取りに発展しやすい台詞があったり、キーワードによって関わる人と一緒に楽しんだ実感や絵本の場面が想起・共有されたりするもの③繰り返しやりたくなるもの④展開に一定のルールがある、又は生活経験の中で親しみのあるもの（食べ物、遊具、動物/親子）が出てくる点であった。以下に、本事例に出てきた絵本を挙げる。

- ・杉山弘之「しゃぼんだまとあそぼう」福音館書店
- ・樺山祐和「かきごおり」福音館書店
- ・ノッカーナアニメーション「すべりだいであそぼう」<https://www.youtube.com/watch?v=bKOVpxPJLnk>
- ・ツペラツペラ「やさいさん」学研プラス
- ・小森厚「どうぶつのおかあさん」福音館書店

（３）思いを育てる環境としての絵本の選択のポイント

紙面の都合上、本稿結果には、対象児の際立った変容の変遷のみをまとめて記した。しかし、実際には、絵本を使って関わりを試みたものの、全く反応が得られなかった日も多く記録されていた。“人と一緒に楽しい”を経験できるような絵本を根気強く探して選択する教材研究が重要であったといえる。勅使千鶴（1999）は、遊びを豊かにする指導をするために、「保育者は子どもの心身の発達段階や彼らの興味、関心を知るとともに、遊びの発達過程とあそびそのもののおもしろさを分析しておくことが求められる。」と述べ、「保育者がおもしろいと感じることやおもしろいと感じるときと子どもたちのそれらと同じこともあれば、異なることもある」ため、実践的にはまず「常に子どもたちの表情やしぐさ、内面を含め遊ぶようすを把握しておくことが、おもしろさの指導を考えたときのポイント」と指摘している。今回の対象児のように、興味・関心の幅が狭く、また人への関心から興味の幅を広げることが難しい幼児に、“絵本”と“その読み手”に興味をもってもらうための絵本選びにおいても、やはりまず子どもの日ごろの様子から興味・関心を把握することが重要であったと考える。

瀧薫（2010）は、「絵本とはよろこびを共有するものである」「一緒にいる大人も楽しんでいるときはじめて、子どもはこころから満足した表情になります」と述べている。今回の対象児にとっても、やり取りの要素があり、一緒に楽しんでいることが実感できる点は共通していた。また、瀧は「子どもたちは、こころから楽しんだ絵本は、何度も繰り返し読んでほしがります。絵本を選ぶ最良の基準は、子どもたちがその絵本を繰り返し読んでほしがるかどうかであると思います」とも述べている。今回の対象児についても、選んだ本に興味に向かない場合には次の候補へ移る決断を繰り返し、最終的には繰り返し読んでほしがることが見つかった。このことから、自閉症の診断を受けている幼児も、絵本の喜びを人と共感しあうことができ、その楽しさから何度も読んでほしがるようになることは共通であることが確認でき、そういった本を探して選択する必要があったと言える。

更に対象児たちは、暦年齢と発達年齢に差があったため、暦年齢に関係なく絵本の選択肢を広げる必要があった。実際には、「経験する身の回りのものや日常生活のなかで起こること」を扱っている絵本や、「オノマトペ」の絵本など、「乳児向けの絵本を選ぶときのポイント」（2013、石井ら）が参考になった。自分自身が声に出して読み、繰り返しやりズミカルな表現の面白さが感じられたものが、子どもにも好まれたと感じる。聞き手である子どもたちの顔を思い浮かべながら、その子の興味や発達にあった絵本を、1冊1冊を楽しみながら丁寧に選ぶことが大切であったと言える。

５ おわりに

自閉症幼児の保育において、認知特性の違いに配慮しなければと思うあまり、一人で過ごしたい気持ちを尊重するだけで働き掛けを控えてしまうことが多かった。しかし、今回の事例で、待つだけでなく適切に働き掛けることで、人を視界に入れるようになり、伝えたい、一緒にやりたいという気持ちが生まれ、伝えたい思いが育ったことから、特性に合わせながら働き掛けることで、対象児の発達を助長できることが明

らかになった。

今後も伝えたい思いがどの子にも育つ保育環境の構成に、絵本を使った働き掛けを取り入れ、その可能性の研究を継続したい。しかしその際、松井剛太（2013）が「本来ならば、十分に遊びこんだ結果、全体的な発達が促されるというべき遊びでの本質が、障害特性面に依拠すると遅れが見られる発達の改善を促すために遊ばせるといように転じる」と危惧しているように、絵本を使った働き掛けが方法論としてだけ先に立ち、幼児の生活の文脈から切り離され、「障害特性を改善する『手段』として位置づけられるもの」になってしまう誤解が生まれることがないように配慮した発信の仕方を考えていく必要がある。

保育においては、どのような子どもに対しても、場面での訓練を行うという視点だけでなく、子どもの力を信じて生活の文脈の中で関わり、環境を通した指導を行っていくことを基本とすることは、常に念頭におきたい。

【引用文献】

- 生田美秋、石井光恵「ベーシック絵本入門」、ミネルヴァ書房、p.50-53, 69（2013）
瀧薫「保育と絵本」、エイデル研究所、p.11,17（2010）
勅使千鶴「子どもの発達とあそびの指導」ひとなる書房、p.110-112（1999）
松井剛太「保育本来の遊びが障害のある子どもにもたらす意義」、保育学研究、第51巻第3号、p.10（2013）

【参考文献】

- きむらゆういち「子ども、あなどるべからず」岩波書店
杉山弘之「しゃぼんだまとあそぼう」福音館書店
樺山祐和「かきごおり」福音館書店
ノッカーナアニメーション「すべりだいであそぼう」
ツベラツベラ「やさいさん」学研プラス
小森厚「どうぶつのおかあさん」福音館書店